

保育者としての専門性を育てるために ～ アクティブラーニングを用いた授業法 ～

To develop professionalism as a childcare teacher
- Teaching Method Using Active Learning -

西 田 明 恵
Akie NISHIDA

1 はじめに

幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針が改訂された2018年4月、その年に私は本学に着任した。それまでは、長期にわたり、幼稚園現場で子どもたちと向き合ってきた。子どもは素晴らしい、我を忘れて夢中で遊び、遊びの中で試し、工夫し、創造し、表現しながら生きる喜びを味わっている。そんな子どもと日々をともにする保育は面白い。私は、学生たちに保育者になりたいという思いを大事にしながらも、子どもと一緒に遊び、一緒に考え、共に過ごすことを心から楽しめる保育者になってほしいと願っている。改訂された要領・指針では、保育の質の向上がより大きなテーマとなっている。卒業と同時にプロの保育者になる学生に保育者としての専門性を身に付けるための授業に取り組んだ。現場の子どもたちの遊びの姿と学生の授業の姿から考察する。

2 幼稚園教育要領改訂について

幼稚園教育要領改訂のポイントとして、次のことが挙げられている。

1. 幼稚園教育において育みたい資質と能力を明確化
2. 5歳児終了時までで育ってほしい具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化するとともに、小学校と共有することにより幼小接続を推進
3. 幼児一人一人のよさや可能性を把握するなど幼児理解に基づいた評価を実施
4. 言語活動などの充実を図るとともに、障害のある幼児や海外から帰国した幼児など特別な配慮を要する幼児への指導を充実
5. 環境を通して行う教育を基本とすることは変わらない

幼児期の教育は、教科を中心とする小学校以上の教育と違って、遊びを中心とした生活を通して、生涯にわたる人格形成の基礎を培っている。2015年8月26日教育課程企画特別部会において学習指導要領の改訂に向けた方針が出された。幼児教育においては、具体的な方向性の一つとして次のことが示されている。『幼児期は、義務教育及びその後の教育の基礎となるものとして、幼児に育成すべき資質・能力をはぐくむ観点から、教育目標・内容と指導方法・評価の在り方を一体として検討する必要がある。具体的には、探求心や思考力、表現力等に加えて、感情や行動のコントロール、

粘り強さ等のいわゆる非認知能力をはぐくむことがその後の学びとかかわる重要な点であると指摘されていることを踏まえ、小学校の各教科の前倒しにならないように留意しつつ、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の明確化を図ること（後略）』

これを受けて改訂の話し合いが進められ、2016年5月30日、幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂に関する中間まとめ骨子（案）が出された。その中では、この明確化について「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を下図の10項目にまとめられた。



また、2016年8月26日 幼児教育部会における審議のとりまとめでは、

- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5領域の内容を踏まえ、特に5歳児の後半にねらいを達成するために、教員が指導し幼児が身に付けていくことが望まれるものを抽出し、具体的な姿として整理したものであり、それぞれの項目に取り出されて指導されるものではない。
- また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、5歳児だけでなく、3歳児、4歳児、5歳児においても、これを念頭におきながら5領域にわたって指導が行われることが望まれる。その際、3歳児、4歳児それぞれの時期にふさわしい指導の積み重ねが、この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながっていくことに留意する必要があると言っている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が保育現場の遊びの中でどのように培われていくのか、またこの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を学生たちにどのように理解させていくかについて、日々の保育や授業の中から研究を進めた。

3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼稚園教育専門部会 主査 無藤 隆氏は次のようにコメントしている。

論点整理で示された方向性や近年の子供の育ちを巡る環境の変化等を踏まえた教育内容の見直しについては、以下のとおりです。

- ・安全な生活や社会づくりに必要な資質・能力を育む観点から、状況に応じて機敏に自分の体を動かすことができるようにするとともに、安全についての理解を深めます。
- ・幼児期における多様な運動経験の重要性の指摘を踏まえ、幼児が遊ぶ中で体の諸部位を使った様々な体験を重視するとともに、食の大切さに気付いたり、食に対する態度を身に付けたりすることを通じて幼児の心身の健やかな成長の増進を図ります。
- ・幼児期におけるいわゆる非認知的能力を育むことの重要性の指摘等を踏まえ、例えば、様々な人と接したり、自分の気持ちを調整したり、くじけずに自分でやり抜くようにしたり、幼児が自分のよさや特徴に気付き、自信を持って行動したりするようにします。
- ・学習プロセス等の重要性を踏まえ、具体的な活動の中で、比べる、関連付ける、総合するといった、思考の過程を示すなど、思考力の芽生えを育むようにします。
- ・社会に開かれた教育課程の重要性を踏まえ、地域の様々な生活や文化などに触れる機会を設けたり、異なった文化を持つ人たちに親しみを持ったりするなどして、幼児に地域の社会生活とのつながりの意識等を育むようにします。
- ・幼児期における言語活動の重要性を踏まえ、幼児が言葉のリズムや響きを楽しんだり、知っている言葉を様々な使いながら、未知の言葉と出会ったりする中で、言葉の獲得の楽しさを感じたり、友達や教師と言葉でやり取りしながら自分の考えをまとめたりするようにします。
- ・身近な自然や生活の中にある、何気ない音や色に気付き楽しむことが、幼児の豊かな感性や自分なりの表現を培う上で大切であることから、自然や生活の中にある音や素材に触れる機会の充実を図ります。

以上のことから、次のように10の項目としてまとめられた。

- ①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり
⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、文字などへの関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現

この10の姿については、2030年の子どもたちの未来を見据えて考えられたものであるが、1つ1つの姿をみると現場では毎日の保育のなかで培っていることでもある。このことが示されたことにより、改めて幼児期の終わりまでに育てたいこと、5歳児の最終の姿としてこれらの姿を目指し、それに向かって歩んでいる子どもたちを支え援助する保育者の役割が子どもたちの成長に大きく影響することを感じた。

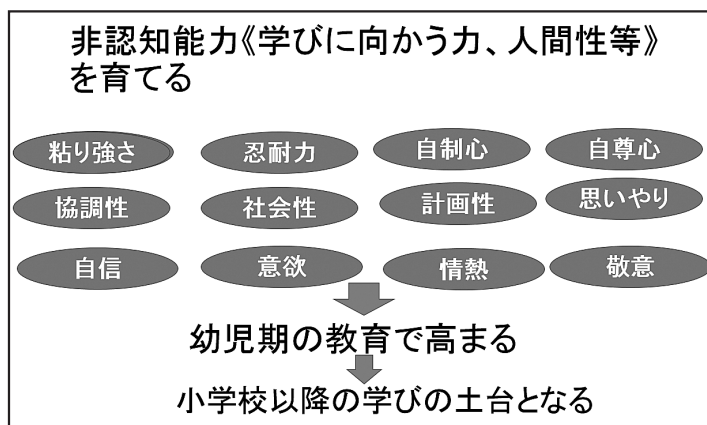
4 非認知能力を育てる

新教育要領の中で、非認知能力を育てることの大切さがクローズアップされている。

遊びの中で、目標や意欲をもち、粘り強く仲間と協調して取り組む中で培われる力、具体的には下記に示すような力である。自分を愛し、自信がもて、他の人を信頼し、人との関係をうまくもち、時には自分の気持ちを抑えたり、我慢しながら頑張ることができるといった人として生きていくた

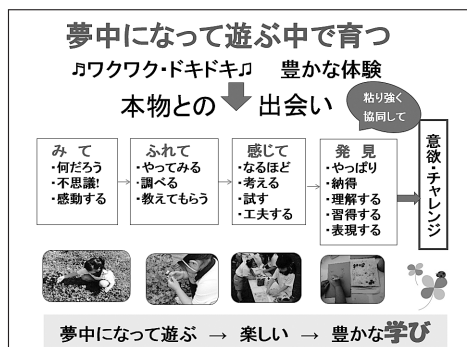
めの大切な力が非認知の力である。

非認知能力が豊かな子どもは、自分で計画をたて、興味をもって取り組み、試行錯誤を繰り返しながら良い方法を見つけ、自分のスキルを高めていくことができる。一人の力ではできないことも、みんなで協力し合って達成へと導くことができる。認知能力も自分の力でのばしていくことができる。こうして考えると非認知能力とは、自分の力で人生を切り開いていく力、即ち「生きる力」である。幼児の教育に携わる保育者は、知識を吸収させるだけでなく、子どもたちが自分の力で生き抜いていく力を育てることが大切である。そして、培われた力が小学校以降の教育へとつながっていくことを意識しながら指導していくことが重要となる。子どもたちの将来を見据え、長期目線で子どもたちを支えていくことが大切であると考え。



5 豊かな体験（遊び）を重視した教育

非認知能力は、幼稚園で子どもたちが夢中になって遊ぶ中で培われていくと考える。特に本物との出会いは、子どもたちの心を揺さぶる。先生や友達との関わりの中で、事物を見て、心を動かし、触れて、感じて、行動を起こす。考えたり、試したりして、知的好奇心を揺さぶり、発見する。やっぱりそうだったのかと納得し、さらにチャレンジをして遊びを広げていく。子どもたちは夢中で遊びに没頭する。その過程では、ワクワク・ドキドキ、おもしろいな、楽しいな、やってみたいと思う気持ちの高まりがみられその中には多くの学びが生まれている。非認知能力が高まり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」も培われていくと考える。



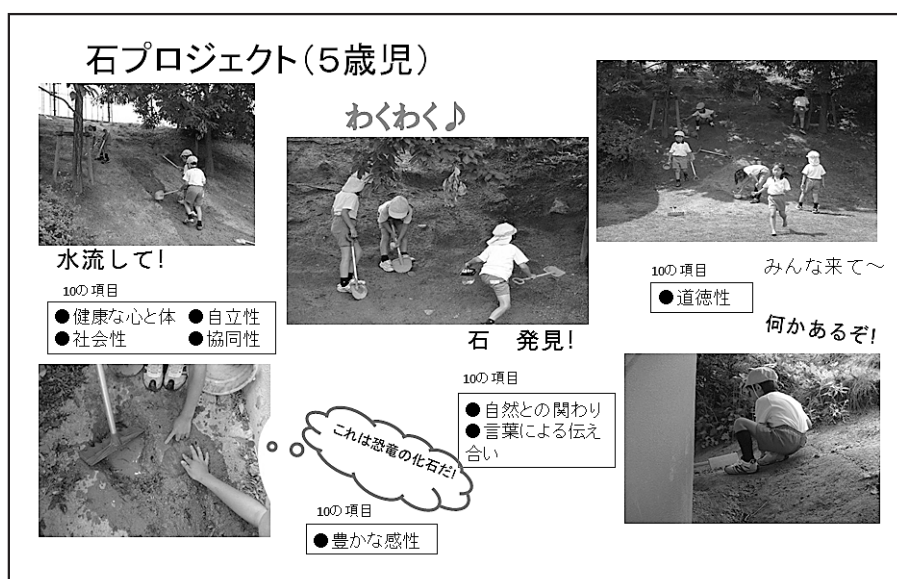
6 事例を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の項目について」探る

ここでは、幼稚園現場の子どもたちがどのように、10の姿や非認知能力などを身に付けていくのかを自身が幼稚園現場に関わっていた頃の保育の事例から述べる。

事例 「石と遊ぶ～化石発見!～」 5歳児 1学期

- ① 家庭で恐竜の図鑑を親子で楽しんだことがきっかけとなり、自発的な遊びの場で「恐竜の化石を探そう」と友達と一緒に石探しを始めた。「石発見」「水流して、掘りやすいから」と石を見付けては掘り出す。そのうち「化石発見!」「これは恐竜の化石だ」「ここはジュラシックワールドだ」等と言いながら、石を化石としてイメージし、石探しをはじめた。一生懸命に、そして集中して取り組む姿がみられた。遊びはしばらく続いた。

①の様子



- ② たくさん石を集めた子どもたちは、集めた石の数を数えたり、「大きいのは、ここに並べよ」「これはどう」「中くらいかな」「これは小さいな」と友達と一緒に比べたり、並べたりして石を分類し始めた。「ここ化石研究所にする?」「そうや!」「博士や」と憧れの人をイメージしながら楽しく遊びを広げていった。また「黒い石、白い石、茶色の石」と色の違いや「これ四角っぽいな」「これは丸いか」と形の違いで分類する姿がみられた。保育者が準備しておいた虫メガネで石を観察し「うーん、これは葉っぱの化石だ」「これは恐竜の骨」「この辺の形が骨みたいだね」等と石の模様からイメージしたことを言葉で伝え合う姿もみられた。「化石研究所」として遊びながら、数量・図形に関心をもったり、思ったこと考えたことを友達と伝え合ったりしながら遊びを広げていった。この遊びの中で、「学ぶこと・非認知能力・10の姿」がどのように培われているかを振り返ってみた。

学ぶこと	非認知能力	幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿
・いろいろな石があることに気付く ・数を数える ・大・中・小の大きさの違いを知る ・形の違いに気付く ・虫眼鏡の特徴や効用に気付く ・石の模様からイメージ力を広げる ・友達と一緒に、目的に向かって考えたり試したりすることの楽しさを感じる	・粘り強さ ・集中力 ・満足感 ・協調性・協同性 ・考えたり、工夫したりすることの楽しさ ・計画性 ・自信 ・意欲	・健康な心と体 ・自然との関わり ・思考力の芽生え ・数量・図形への関心・感覚 ・協同性 ・言葉による伝え合い ・豊かな感性と表現 ・道徳性

②の様子



- ③ 子どもたちの興味をさらに広げたいと考え、保育者は机の上に恐竜や化石の図鑑を出していた。興味のある子が集まり、本の内容を書き写したり、石の絵を描いたりして楽しみだした。化石に興味をもちながら文字への関心や表現活動にも繋がっていった。保育者は、子どもたちの気付きや発見、工夫に共感したり承認したりして意欲を引き出すように関わった。

学ぶこと	非認知能力	幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿
・石にはいろいろな模様があることに気付く ・図鑑見て、いろいろなことに気付く ・イメージしたことを自分の思いでデザインすることを楽しむ ・文字を読む ・文字を書く ・友達に刺激を受けながら自分もやってみようと意欲をもつ ・友達と一緒に、目的に向かって取り組む楽しさを感じる	・集中力 ・考えたり、工夫したりすることの楽しさ ・興味をもったことに最後まで取り組む粘り強さ ・文字が書ける喜び ・イメージを絵に表せる喜び ・自信 ・意欲	・健康な心と体 ・自然との関わり ・思考力の芽生え ・数量・図形・文字への関心・感覚 ・協同性 ・言葉による伝え合い ・豊かな感性と表現

③の様子



- ④ 子どもたちの興味をさらに広げたいと考えていたところ、教員が家庭から「アンモナイトの化石」を持ってきた。子どもたちは本物の化石に興味を示し、見たり触れたりしていた。いろいろな石を見て「これは、葉っぱの化石だ」などと学者になったようなつもりで発見を楽しみ、遊びを広げていった。その頃、福井県で小学生が1億年以上も前の化石を発見したというニュースが流れた。新聞記事を掲示し、その話を子どもたちに話すとさらに興味・関心を広げ1か月以上も遊びは続いた。子どもたちは、たくさん集まった石で、「セメントをつくって、石を

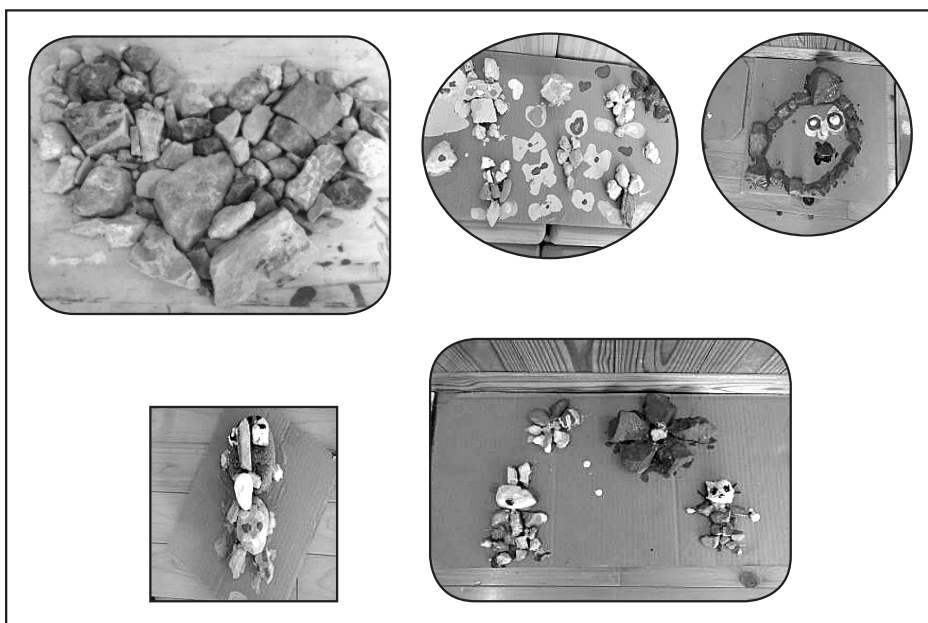
並べよう」と思いを広げていった。その姿を見て、保育者は「石アートを楽しませたい」という願いをもった。

④の様子



- ⑤ 1学期にたくさん集めた石。子どもたちの「セメントに並べる」と言った言葉から教師は石でアートを楽しませたいと考えた。ある日、貯めてあった石を使って遊びだしたので、段ボール紙を出した。子どもたちは友達と一緒に石を並べて遊び始めた。また、豊かな表現をイメージした保育者は、絵の具を提供した。子どもたちは互いの思いを伝え合いながらアートを楽しんだ。

⑤の様子 石アートに取り組む



幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

- ・数量や図形、文字などへの関心・感覚
- ・言葉による伝え合い
- ・豊かな感性と表現

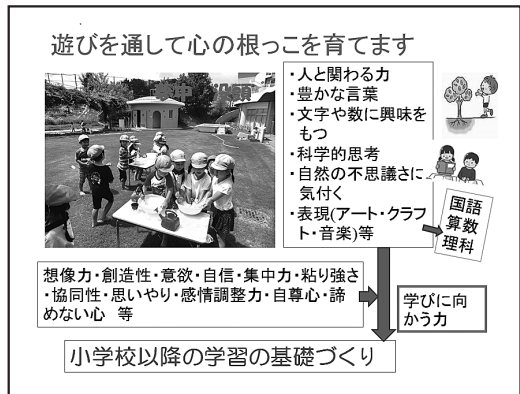
○石プロジェクトを通して感じたこと

大人にとっては「たかが石」しかし、子どもにとっては「されど石」。自分で見付けた大切な石。自分で考え、自分で決め、自分で遊びを創り出した時、子どもたちにとって石ころは宝石に生まれ変わった。この遊びを通して、次のようなことが考えられる。

- ・子どもがワクワクしながら取り組む。その中で学びは生まれる。
- ・主体的に、目標や意欲、興味関心をもち仲間と協力しながら粘り強く取り組む。この過程で学びに向かう姿勢が培われる。
- ・自分で決めて、自分でやることで様々な学びを育んでいく。
- ・幼児期に、試行錯誤や興味や関心を追求することにより得た感覚や知恵・知識は、将来に向かう学びの根っことなる。

7 遊びを通して、学びに向かう力を育てる

遊びの中で子どもたちは「自ら環境に関わり」「主体的に」「夢中で」「熱中して」「没頭して」遊んでいる。新教育要領で大切にしようとしている「アクティブラーニング」を幼稚園では大切に、保障できるよう環境づくりに努めている。遊びの中で、夢中になって没頭している瞬間に子どもたちは伸びようとする芽を伸ばしている。そして、その中で小学校の国語や算数、理科につながるたくさんの学びを得ている。また、意欲や自尊心・やり遂げる力・感情を調整する力・人と関わる力・思考力・思いやりなど「目には見えない心の力」＝「非認知能力」も育んでいるのである。これらの育ちはその後の“生きる力”に大きな影響を及ぼすと考えている。毎日の遊びや体験を大切に、体験を通して、心の根っこをしっかりと育てていくことが保育者に求められる資質であると考えます。



8 保育養成校の学生に培ってほしい力

この事例からも考えられることとして、「非認知能力」や「幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿」は、子どもたちの主体的な遊びの中でこそ培われていくということである。その遊びを充実させるためには、子どもの傍らで援助する教師のガイドが重要となる。子どもたちとの日々関わる保育者が大切にしなければならないことを考察する。

○子どもが興味をもったことに取り組ませる。

○豊かな環境を用意する。～熱中できる遊びの環境があるか～

- ・子どもが「おもしろそう」と感じたり「やってみたい」と関わりたくなるような素材を十分に用意する。
- ・図鑑や絵本を提示する。
- ・子どもの多様な感性を引き出す環境構成の工夫。それには、教師の感性や発想が重要となる。教師の感性・発想次第で遊びの質は大きく変わってくる。多くの選択肢を用意し、そこで子どもがどのように活動したかを観察し、振り返り、時には、同僚と話し合ったりしながら、保育者としての質を磨いていくことが大切である。

○子どもと保育者が対話する。

- ・一方的な指導や指示・提示でなく、子どもが発想を豊かにしたり、考えを深めたりできるように、対話することが大切である。

○小学校とのつながりを意識する。

- ・3歳児・4歳児・5歳児にふさわしい保育活動を通して「学びに向かう力」を育てていくことが大切である。
- ・特に5歳児では「目的に向かって遊んでいるか」「友達と協力して遊んでいるか」「集中して

遊んでいるか」「試行錯誤しているか」等を振り返り、遊びの充実に向かうことができるような教師の関わりが大切となってくる。

保育現場で保育者は、これらのことに留意しながら子どもと向き合っている。このような援助の在り方を学生たちが理解するためには、アクティブラーニングを用いた授業、即ち学生自身が主体的で対話的な深い学びを経験することが、子ども理解へと繋がるのではないかと考えた。

9 保育者としての専門性を育てるために

(1) 本校の教育実習は、2回生の6月（前期）と11月（後期）に4週間、計160時間の実地実習を体験している。実習前に実習課題についてアンケートを実施し、学生の意識調査をした。対象は2回生、55名である。アンケートの方法は、各項目の中から自分が課題とすることを選択し、その理由を自由記述するという方法を用いた。結果は、下記の通りである。

①アンケートの内容

a. 前期実習の課題（項目の中から選択する）

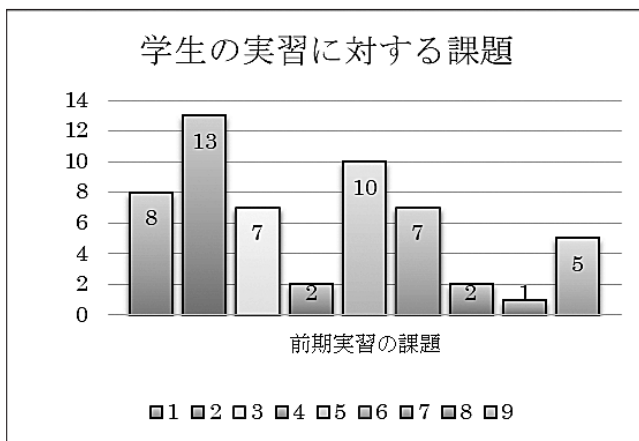
- 1 子どもの観察や関わりを通して3歳児から5歳児までの発達の様子を知る。
- 2 保育者の子どもへのかかわりや援助の仕方を学ぶ。
- 3 遊びを育てる環境構成や保育者の援助について学ぶ。
- 4 配慮を要する子どもへの関わり方を学ぶ。
- 5 トラブルやいざこざが起きた時の保育者の援助の仕方を学ぶ。
- 6 部分実習等を通して、保育技術を学ぶ。
- 7 指導案（部分実習・責任実習）の書き方を学ぶ。
- 8 子育て支援（預かり保育、保護者支援）等について学ぶ。
- 9 その他（ ）

b. なぜそのことを学びたいのか理由を書きましょう。

・自由記述とした。

②アンケートから考えられること

○内容 a 前期実習の課題



最も多い順に、「保育者の子どもへの関わりや援助の仕方について学ぶ」が13名、次いで「トラブル時の援助方法」が10名、「関わりを通して発達の様子を知る」が8名、「遊びを育てる環境構成と援助」「保育技術を学ぶ」が各7名「配慮を要する子への関わり方」「指導案の書き方」が各2名、「子育て支援」1名、その他（幼稚園ならではの教育を学びたい・保育所との違い・保護者への対応）5名という結果であった。

○内容、b なぜ学びたいのかについての学生の記述は下記の通りである。（一部抜粋）

1、保育者の子どもへのかかわりや援助の仕方を学ぶ
・座学とは違い、実際の場で経験できるので、先生方の姿や子どもへの関係をしっかりと観察し学びたい。 ・保育者の子どもへの関わりを観察し、発達の違う子どもたちへの援助を学びたい。 ・保育園とはまた違った援助の仕方があると思うから、どのような関わり方が子どもたちの成長につながるのかを知りたい。 ・保育所実習で子どものやる気を引き出す声掛けについて学ぶことができたので幼稚園ではどのような工夫をされているのかを知りたい。また遊びに繋がるような環境構成についても学びたい。
2、トラブルやいざごは起きた時の保育者の援助の仕方を学ぶ
・毎日トラブルは起こると思うが、その時どのように対処してよいかわからないから。 ・保育実習の際にトラブルの対応が分からなかった。子どもの気持ちを代弁することの大切さや難しさを感じた。気持ちに寄り添い、読み取ることができず後悔している。幼稚園で保育者の姿を観察し、学びたい。
3、子どもの観察や関わりを通して3歳児から5歳児までの発達の様子を知る
・子どもたちの年齢の発達の違いや、年齢にあわせた関わりについて学びを深めたい。 ・幼稚園ならではの保育者の子どもへの関わりを観察し、3歳児から5歳児までの発達の違いについて、また発達の違う子への援助をどのようにされているか学びたい。 ・保育所実習で0・1歳クラスに入ったので、3歳から5歳の子どもの発達の様子や遊びなどを観察し学びたい。

・同じクラスにいる子どもでも、年齢によって発達に差があったりするので一人ひとりに対する援助の在り方を学びたい。
4、遊びを育てる環境構成や保育者の援助について学びたい
・遊びを育てる環境構成は1つではないと思う。同じ遊びでも園によって環境構成の仕方は違うと思う。環境構成について幅広く学びたい。 ・子どもが「〇〇したい」と思った時「〇〇してみよう」と言って一緒に楽しく遊べる環境づくりができる保育者になりたいから。 ・幼児教育において環境構成がとても大切なことを学んだ。実際に子どもたちがどのように環境に関わり学んでいるのかを観察し学びたい。 ・子どもが遊びに興味をもち「やってみたい」と思えるような環境構成がどのようなものであるかを学びたい。 ・興味や意欲がもてるような声掛けなど様々な援助について学びたい。 ・何をするのにも環境構成は大事なので保育者や園の環境構成について学びたい。

学生たちは、遊びの環境構成や子どもへの援助の在り方が、子どもの育ちに大きく影響することを感じ、そのためにどのような保育方法があるのかを知ろうとしていることがわかった。このことを具体的に理解するために次のような授業を大切にした。

(2) アクティブラーニングを用いた授業の1方法として幼児の遊びの様子を記録したDVDや写真などを視聴し、それぞれが感じたことを記録し、それを用いてグループで話し合ったり、付箋に思いを書いて共通の考えをまとめたりなど、学生同士の思いを共有する時間を設け、まとめたことをプレゼンするという演習型の授業を行った。ここでは、いろいろな意見を聞くことで共通する思いや多様な意見に触れ、新たな気づきを得ることができた。子ども理解と教師の援助の在り方について学びを深める授業になった。



(3) 講義とともに、大切にしたいことは、学生が子どもの行為をどれだけ楽しめるかということである。子どもが遊びの中で考えたり、試したり、表現する姿や言葉や行動に「おもしろい」と感じるができるかどうかである。子どもを知るには自分が子どもの気持ちになって遊ぶ

ことが大切である。そこで、本学園内に位置する付属幼稚園の施設を借用して、「砂遊び・泡遊び」の遊び体験をした。ワクワクした気持ちで参加する学生もいれば、「えー遊ぶの？」と言う学生もいたが、遊んだあとの学生の表情は、生き生きとし、作った泥団子や泡スイーツを嬉しそうに学校まで持ち帰る様子もみられた。学生たちは、卒業と同時に「保育者」になる。保育の現場で、教師が担う役割は大きい。講義で、幼児理解や保育者の援助等を学んでいるが、そこで得た知識を自らが遊ぶことを通して実感してほしいと願い、主体性や対話性を重視したアクティブな授業方法を実施した。

事例 学生たちの「泥遊び・泡遊び」

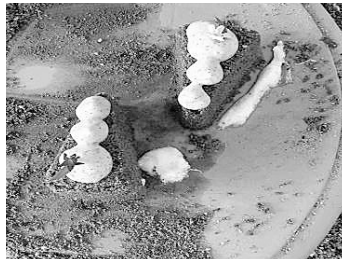
○環境は、子どもたちの遊び環境と同じように設定した。

環 境	学生遊びの様子
・砂場 ・泡遊びの材料・用具を準備しておく 園 庭 机 材料 水道 砂場 ・砂遊びでは、砂の感触を味わってほしいと願い、用具は数個のスコップと型抜きを出しておく。	【 砂場 】 ○山をつくる ・トンネルつくろうと数名の学生が集まり四方から素手でトンネルを掘る。砂の感触を味わいながらトンネル貫通すると穴の中で手を繋ぎ喜ぶ。「つながった～」 ・友達と協力して大きな山や深い池をつくる。 ・砂が苦手で傍観していた学生が、友達に誘われる。楽しそうな雰囲気に砂を触って遊びだす。   ○団子をつくる ・いくつも作って並べる。 ・大きな団子、小さな団子をつくる。 ・きれいな丸い団子をつくろうと一生懸命の様子。 ・「びかびかの泥団子つくろう」とさら砂をつけたりして挑戦する。学園のグラウンドに適した砂があると探しに行く姿もみられる。 ・三角の型抜きでケーキを作る。いくつも並べ砂ケーキの上にはなびらをのせてトッピングする。「かわいい」「おいしそう」と友達に認めてもらい喜ぶ。

・泡遊びの材料

固形石鹸、ボール、すりこぎ、おろし器、泡立て器、おたま、大小のカップ、スプーン、雑巾、絵の具

・バケツをひっくり返してホールケーキをつくる。飾りに細かい花びらを一面にのせ、見た目も美しいケーキができて喜ぶ。



【泡遊び】

・シャボン玉を飛ばして遊ぶ。しゃぼん玉の飛んでいく様子を見て喜んでいる。
・材料ワゴンから、容器やストロー、布などを選び、シャボン玉の吹き口を作る。液をつけて吹くと泡ブクのシャボン玉がどんどん出てきて喜ぶ。

・石鹸をおろし金でおろし細かくする。細かくなった石鹸をボールに入れ泡立て器で攪拌する。「わー」「おもしろい」「トロトロ」「見て～」と子どものように喜ぶ。

・「もっと細かくしよう」と試行錯誤を楽しむ。

・できた泡をカップに入れる。「ソフトクリーム」「アイス」と友達に伝える。



・活動の様子に応じて絵の具を出す。

・砂でケーキを作っている友達にできた泡を届け、ケーキのトッピングにする。「生クリーム!」「美味しそう!」

・絵の具をみつけ加える。黄色や水色の泡ができ、とても喜んで試して遊ぶ。



遊び体験の授業後、砂遊びと泡遊びをした感想を求めた。

感想①【砂遊び】

- 久しぶりに泥団子をつくって何よりも楽しかったというのが一番です。砂でお城をつくったりして、とても集中して取り組みました。
- 砂遊びは、子どもが想像するものが具現化しやすく、想像力が養われると思いました。
- 初めて、砂遊びで泥団子をつくりました。はじめは作り方がわからず、一生懸命に砂を握っているだけでしたが、周りにいた友達がそれを見ていたのか、作り方を教えに来てくれました。とても嬉しかったです。また、その友達と砂遊びを通して話したり、一緒に作ったりして親交を深めることができました。砂遊びでは、視覚や触覚、聴覚などの五感を刺激します。また、想像力や社会性、協調性も学ぶことができますと思います。
- 泥団子遊びは久しぶりでとても楽しかったです。私は幼稚園の砂場の砂以外に、校庭の砂を使うなど工夫して泥団子をつくりました。雨の後ということもあり、乾いた砂が少なかったため十分に遊ぶことができず、環境を整えることの大切さを実際に遊んで改めて感じました。周りの人とあっち、こっちと砂を探してまわり、たくさん話をすることができました。できた団子を人に見せて、褒めてもらい嬉しかったです。砂遊びの中で、考えたり工夫することや、教え合い、相談すること、そして、完成して褒めてもらった時の達成感などたくさんの学びがあると感じました。
- 私は、小さい頃から汚れることが好きではなく、砂に触れることにも抵抗がありました。でも皆が楽しそうに遊んでいる姿を見て、「汚れてもいいや」という気持ちになりました。大人の私でも人が楽しんでいるのを見て楽しそうと思うことができたので、私と同じような気持ちの子どもがいても、周りの楽しそうな雰囲気を感じたら一緒に遊ぶことができるのではないかと思います。

感想②【泡遊び】

- 泡遊びを今までしたことがなく「こんなに楽しいものなのか」と感動しました。始めは触ることに抵抗があったので、皆が楽しそうに遊んでいる姿をみて自分も触ることができました。子どももこういう気持ちなのだと思います。また、私たちが泡遊びをしている間に、色をつけたいという要望が出てきました。すると先生が絵の具を出してくれたことが環境づくりの工夫だと思いました。始めから出すのではなく、子どもが想像して、やりたいことを自分から考えることが大事で保育士はその要望に応えられるよう用具を十分に準備しておくことが大切だと思いました。
- 泡遊びでは、みんなが作っているのを見てから作り始めました。きれいに色がついたり、泡立ったりすることに疑問を抱いていましたが、いざ実際に自分たちで作ってみると、液を混ぜることでどんどん泡立っていき、少し色を加えることできれいな色をつくることができました。また、色々な色を少しずつ混ぜると色が変わっていき、色彩を楽しく覚えるのに良い方法だと思いました。
- シャボン玉遊びではどのように吹いたらシャボン玉がたくさんできるのか、1回吹く量でどれ

だけとばし続けられるのかななどを考えながら遊んでいました。子どもたちが遊ぶ時に、私と同じように色々なことを考えながら遊んでいるのだと感ずることができました。またシャボン玉が宙に浮いている光景がとてもきれいでみとれました。このような光景を見て、子どもたちの豊かな感性が育まれるのではないかと感じました。

- この遊びで初めて石鹸を削りました。固形石鹸を手でこするとヌメヌメして泡ができるのに、削るとサラサラしていて新しい発見ができました。また、その削った粉に水を加えるとモコモコの泡ができました。水の量によっても泡の弾力が違い、それをかき混ぜる速さや時間でも変化がありました。色を加えるととてもきれいでした。
- 周りの人を見ていると様々な遊び方があり、環境が整っているからこそ遊びが発展するのだと改めて感じました。
- 泡遊びをしていた子が手いっぱい泡をつけて握手するように握ってきて、私は遊びに参加しました。自然に遊びに参加するきっかけになりました。周りの人を見ると手と手を握って泡を付け合ったり、においを一緒に嗅いだりして楽しんでいました。泡遊びの中で子どもたちは、協力して泡をつくる協調性、社会性や想像力、色や匂いなどを感じる五感、不思議に思う気持ちなどを学ぶことができると考えます。
- 砂を掘って水を貯め、泡を入れて泡風呂をつくりました。中には入れませんでしたが、子どもだったら裸足で入ってみたりするのかなと思いました。道具や材料がたくさんあることで様々なものが想像でき、やってみたいという気持ちがわきました。子どもたちは私たち以上に発想力があるので実際に関わるのが楽しみです。全員で片付けまでしっかりできたので良かったと思います。

(4) 体験的授業を通して学生が学んだこと

どれだけ遊びを楽しめるか疑問であったが、学生たちは、遊びそのものの行為をおもしろがり、子どもの気持ちになって遊びを広げていった。

- 自分が遊ぶことを通して、「子どもも私と同じようにいろいろなことを考えながら遊んでいるのだろうか」「(泡風呂の中に) 子どもだったら裸足で入ってみたりするのかな」「皆が楽しそうに遊んでいる姿をみて自分も触ることができた。子どももこういう気持ちなのかな」等、「子どもだったらどうするか」と子どもに思いを馳せ、子どもの気持ちに近づこうとする姿がみられた。
- 遊びの中で「友達が作り方を教えてくれた」「友達と一緒に考えた」「友達の姿を見て心が動いた」「手をつないだことがきっかけで遊びに参加した」等、遊びの中で友達と互いに支え合い影響し合って人は育っていくことを学んだ。
- 想像力・創造力・社会性・協調性・五感力・発想力等が育つことを自らが遊ぶことを通して体験的に学んでいた。
- 子どもの主体性を育むためには、環境構成や保育者の援助の在り方が重要であることに気付いた。
 - ・泥団子づくりには、乾いた砂が必要である。当日は雨上がりのため学園内を歩き回り乾い

た砂を探した。

- ・材料や道具がたくさんあることで様々なものが想像でき、やってみたいという気持ちがわいた。
- ・周りの人たちを見ていると、様々な遊び方があり、環境が整っているからこそ遊びが発展することに気付いた。
- ・泡遊びの途中で、先生が絵の具を出してくれたことが環境の工夫だと思った。子どもの要望に応えられるように用具を準備しておくことが大切である。

10 まとめ

今回、学生の主体性や対話性を大切にしたいと願い、アクティブな授業を行った。遊び体験で、学生の様子を見ていると実に楽しそうで、構成された環境に心を動かし、自ら関わり、主体的に遊ぶ姿がみられた。その遊びの過程をみていると、園・所で子どもたちが遊びに取り組む過程と同じようなことを体験していた。保育を志す学生たちは、遊び心がある。顔に泥や泡がついていても平気で夢中になって遊んでいる。「楽しい」「おもしろい」という声も多数聞かれた。自分が楽しいから子どもの遊びをみても楽しめるだろうし、おもしろがれるのだと思う。アクティブな授業の中で体験したことが、子どもを理解することや保育者の援助の在り方を知ることに関がると学生の取り組みから感じた。

参考文献

- ・文部科学省、幼稚園教育要領（平成30年4月公示）
- ・文部科学省、教育課程企画特別部会学習指導要領の改訂に向けた方針（2015年8月）
- ・文部科学省 幼稚園教育要領と保育所保育指針に関する中間まとめ骨子（案）
- ・文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会用幼稚園教育専門部会 現代諸課題を踏まえた教育内容の見直し 無藤 隆
- ・GaKKen あそびから学びが生まれる動的環境デザイン 大豆生田 啓友編集
- ・GaKKen こども・保育・人間 汐見 稔幸著